

## 一元論の射程：エルンスト・ヘッケルの思想(1)

福元, 圭太  
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5351>

---

出版情報：言語文化論究. 13, pp. 79-88, 2001-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 一元論の射程

— エルンスト・ヘッケルの思想(1) —

福元圭太

### 0. はじめに

- 1-1. ヘッケルの生涯と著作
- 1-2. チャールズ・ダーウィンとその周辺
- 1-3. 講演「ダーウィンの進化学説について」

(以下続稿)

- 1-4. 講演「総合科学との関係における現代進化論について」
- 1-5. 講演「宗教と科学の紐帯としての一元論 —自然科学者の信仰告白」
- 1-6. 『宇宙の謎』

### はじめに

本稿で取り上げようとするエルンスト・ヘッケル (Ernst Heinrich Philipp August Haeckel 1834-1919) は生物学者であり、筆者はそのような学問領域の門外漢であるが、ドイツ青年運動の思想的背景を調べていく過程で、この人物が青年運動のバックボーンとなった人物たち、すなわちグスタフ・ヴィーネケン、フェルディナント・アヴェナリウス、オイゲン・ディーデリヒスらの思想形成や、筆者の専門であるドイツ文学を含むドイツ現代精神史の領域、特にさまざまな意味でプロブレマティッシュなルートヴィヒ・クラージェス、オスヴァルト・シュペンGLER、ルードルフ・シュタイナーらに大きくかかわっていたことが次第に鮮明になってきた。

本稿は「エルンスト・ヘッケルの思想」を副題として、ヘッケルの講演と著作から、その思想の特徴を抽出することを目的とする。以降「ドイツ青年運動とヘッケルの思想」を論の主眼としながらも、上記の思想家たちとヘッケルの関係をはじめ、この稿でもふれる「ゲーテの形態論とヘッケルの思想」、「フロイトの精神分析的方法へのヘッケルの影響」、「フリードリヒ・エンゲルスの唯物史観とヘッケル」、「ヘッケルの一元論から社会ダーウィニズムないしナショナリズムへの移行」、周縁的な問題としては「ユーゲント・シュティールの造形芸術とヘッケル」といった諸問題を考察の対象とする予定である。

ヘッケルは後述するように、ダーウィンの進化論の最も有力な支持者の一人であり、ドイツにおける進化論の普及、伝播に多大な貢献をなした。ヘッケルはまたダーウィンの研究を超えて、独自の自然科学的哲学を構築していった。したがって上記の諸問題を考えることは、換言すればダーウィンの進化論とそれに基づくヘッケルの思想がドイツ現代精神史に与えた衝撃の射程を測るという作業にほかならない。世紀転換期から第一次世界大戦

を経てヴァイマル共和国に至るドイツ現代精神史のアマルガムの中で、ひとつの自然科学的思想がドイツの文化的営為、のちには政治的イデオロギーにまでどのような影響を及ぼしたのかを、以下で明らかにしてみたい。

### 1-1. ヘッケルの生涯と著作

エルンスト・ヘッケルの人物と著作について基本的な事実関係<sup>1)</sup>をおさえておく必要があるが、生物学の専門的な領域におけるヘッケルの貢献に関しては、素人である筆者の手にあまることなので、ここでは断念せざるを得ない。

エルンスト・ヘッケルは1834年2月16日、ベルリン近郊のポツダムで法律家の息子として生まれた。幼少時をメルゼブルクで過ごしたヘッケルは1852年から58年にかけてベルリン、ヴェルツブルク、ヴィーンの各地で医学を学ぶ。その後ほんの短い期間、開業医として働くが、大学に戻り1861年にはイエーナ大学で比較解剖学の博士号を取得する。翌62年には同大学の動物学助教授に就任、65年には教授に昇進している。ヘッケルは62年あたりから1859年にダーウィンが『種の起源』で世に問うた進化論を支持し、ドイツにおける進化論のもっとも有力な推進者となる。ヘッケルはその主著と呼ぶべき1866年の『生物の一般形態学』ですでに明確な進化論的立場をとるようになる。ヘッケルはクラゲ (Medusen)、管クラゲ (Siphonophoren)、放射虫 (Radiolarien)、石灰海綿類 (Kalkschwämme) など、深海の原始的な動物に関する進化論的・形態学的論文を次々と発表し、これら深海の原生動物に関してなんと3702種もの新種を発見している。

ヘッケルはまた人間をも含めた自然システム (ein natürliches System) の形態学 (Morphologie) をダーウィンの進化論を基に構想する。さらにダーウィンを超えて、進化論を無機物に関しても当てはめるとともに、無機物から有機物の発生の過程に進化論的發展を考えた。万有の事象をこのように進化論的發展という一つの原理から見ることによって、ヘッケルの「統一科学」 (Einheitswissenschaft) が準備されることとなり、その一元論 (Monismus) が明確な形をとるようになる。ヘッケルの一元論はこのように機械論的唯物論の側面を多く持っているが、それはまた汎神論の陰画ともなっており、のちに見るように唯物論と汎神論の独特な混交がヘッケル一元論の特徴となっている。ここにはフランスの生物学者ラマルクの進化論的考察と、「形態学」の語をもってわかるようにゲーテ的な自然哲学的生物学が影響していると考えられる。

ヘッケルの大きな功績の一つとして、生物学の分野にさまざまな新しい概念をもたらしたこともあげねばならない。われわれにもなじみのあるものでは「個体発生」 (Ontogenie/Ontogenese) と「系統発生」 (Phylogenie/Phylogenese) といった概念。また「生物地誌」ないし「生物分布学」 (Chorologie) のような語も何を意味するかは想像がつく。このあたりから専門的になるが「原腸胚」ないし「囊胚」 (卵発生における胞胚の次の段階) (Gastrula)、「腸祖動物理論」 (原腸胚状の構造をもつ仮想の原始動物を組み込んだ理論) (Gasträatheorie) 等々。

「生態学」 (Ökologie) すなわち「エコロジー」というわれわれにとって非常になじみ深い言葉の産みの親もまたヘッケルである。生物をその相互の関係および非生物的環境との関係において研究する学問と定義できる生態学ないしエコロジーは、今日いささかインフ

レーション気味に使用される言葉という観があるが、この概念なしに今日の環境問題を語ることはもはや不可能になっているのも確かだ。エコロジーの概念は先に挙げた1866年の著作『生物の一般形態学』に初めて現れる。

先ほどの「個体発生」と「系統発生」に戻るが、ヘッケルは「反復説」を定式化することによって、後世に甚大な影響を及ぼすことになった。「生物の個体発生は系統発生を繰り返す」と要約できるこの定式は、すでにメッケル<sup>2)</sup>(Johann Friedrich Meckel 1871-1833)、ベアー(Karl Ernst von Bear 1792-1876)らが提唱し、ヘッケルの師であるミュラー(Fritz Müller 1821-1897)やダーウィンも、個の発展と種の発展の相似的關係を報告していたが、ヘッケルはこれを1872年、「生物発生の基本法則 (Biogenetisches Grundgesetz)」として定式化した。これについては続稿でさらに解説を加える。

ヘッケルは科学と世界観をつねに結びつけようとするタイプの科学者であった。そのため生物学に基づいたヘッケルの世界観ないし宇宙観は、同時代の精神界に広範な影響力を及ぼすこととなった。1860年代後半から明確な形をとりはじめたヘッケルの一元論の思想は、1899年の著作『世界の謎』(Die Welträtsel)と、その補遺というべき1904年の『生命の不可思議』(Die Lebenswunder)に、科学の専門家でない読者にも解るようにまとめられている。特に前者は、瞬く間に25種類の翻訳が出版され、ドイツ語圏だけで50万部を売りきった大ベストセラーとなった。

20世紀に入るとヘッケルは社会ダーウィニズムへのアンガージュを強め、1906年には「ドイツ一元論者協会」(Deutscher Monistenbund)を創立。また意外なことにヘッケルの『自然の芸術形態 (Kunstformen der Natur)』というテキストを付した100枚のイラストレーション(1899-1904)が造形芸術家やユージェント・シュティールの建築家に影響を与え、ヘルマン・オープリスト(Hermann Obrist 1863-1927)や、ヘルマン・フィンスターリン(Hermann Finsterlin 1887-1973)らの建築や装飾にはヘッケルの『自然の芸術形態』の痕跡が見うけられる。これら個々の問題についても後述する予定である。

上にもいくつか書名をあげたが、以下にもう一度ヘッケルのおもだった著作を整理しておこう<sup>3)</sup>。なお書名には長大な副題がついている場合が多いが、それらは省略した。

- ・ *Die Radiolarien*. 1862. (『放射虫』)
- ・ *Generelle Morphologie der Organismen*. 1866. 2 Bände. (『生物の一般形態学』)
- ・ *Natürliche Schöpfungsgeschichte*. 1868. (『自然の創造史』)
- ・ *Anthropogenie oder Entwicklungsgeschichte des Menschen*. 1874. (『人類の発展史』)
- ・ *Der Monismus als Band zwischen Religion und Wissenschaft. Glaubensbekenntnis eines Naturforschers*. 1892. (『宗教と科学の紐帯としての一元論 — 自然科学者の信仰告白』)
- ・ *Systematische Phylogenie*. 1894-96. 3 Bände. (『体系的系統発生』)
- ・ *Die Welträtsel*. (sic!) *Gemeinverständliche Studien über monistische Philosophie*. 1899 (『世界の謎 解りやすい一元論哲学の研究』)
- ・ *Die Lebenswunder*. 1904. (『生命の不可思議』)
- ・ *Kristallseelen. Studien über das anorganische Leben*. 1917. (『結晶の魂 無機物の生命に関する研究』)

## 1-2. チャールズ・ダーウィンとその周辺

エルンスト・ヘッケルを論じる前にわれわれはダーウィンの仕事を大急ぎで想起しておこう。チャールズ・ダーウィン（1809-1882）はイングランド西部のシュルスベリに医師の子として生まれた。22歳のときイギリス海軍の測量船ビーグル号に乗り込み、約5年間（1831-36）南半球を周航。当地の動植物や地質の調査を行う。その間、南アメリカやガラパゴス諸島で「進化論」を確信したことはつとに知られている。イギリスへ帰国後、経済学者マルサスの『人口論』に示唆を受け、進化の説明として自然選択説を取るようになる。ところが1858年、マレー群島で博物学研究にいそんでいたウォレス（Alfred Russel Wallace 1823-1913）から同じ自然選択説に基づく進化論的論考が送られてくる。進化学説の先行権を奪われるのではないかと狼狽したダーウィンは著作の執筆を急ぎ、1859年の秋、ロンドンのジョン・マレー社から『種の起源』(*On the Origin of Species*, 1872年の最終第6版で表題から *On* がなくなる) を刊行することとなった。

自然科学の学説に「イズム」がつくことはまれで、思い浮かぶのはこの「ダーウィニズム」とメンデルの遺伝学にちなむ「メンデリズム」くらいであろうが、これはダーウィンの進化学説が生物学、いや自然科学の領域を超えて広く世界観のレベルにまで影響を及ぼしたことの証左にほかならない。

ダーウィニズムが浸透していく条件はすでに整っていた。過去にガリレオ、デカルト、ニュートンらを経験したヨーロッパでは、キリスト教的世界観に並行してすでに機械論的世界観も成立しており、後者は時代と共にますます強化されてきたと言ってよい。また18世紀末からまさにイギリスで産業革命が開始されて以降、社会を支配したものは「進歩」への信仰であり、経済的にも自由放任（レッセ・フェール）の合言葉のもと、「自由競争による繁栄」という弱肉強食、適者生存の理念に疑問を差し挟む余地はなくなっていた。こうしてダーウィニズムは、生物学上の論争を超えて、一つの世界観、ひとつの「イズム」として受け入れられていったのである。

『種の起源』よりも前に（自然選択説ではない）進化論的な考えを発表したがゆえに、ダーウィン以前からのダーウィニストであったといわれるイギリスの哲学者ハーバート・スペンサー（Herbert Spencer 1820-1903）や、同じくイギリスの動物学者で「ダーウィンのブルドック」というあだ名を頂戴するほどダーウィンの説の擁護と伝播に懸命だったハクスリ（Thomas Henry Huxley 1825-1895）、そして前出のウォレスを含めて、生物学史家のグリーンは、ダーウィニズムを以下のように定義した。

「ダーウィニズムという語は、1850年代後半および1860年代前半にスペンサー、ダーウィン、ハクスリ、ウォレスによって多少とも独立に到達されたと考えられる一個の世界観として使用されるべきである。」<sup>4)</sup>

ちなみにここでダーウィンの祖父エラズマス・ダーウィンについて言及しておきたい。祖父ダーウィンは多才な人で、医師、科学者であり、また教訓的詩人としても名をなしていた。また進化論の先駆者とされる人物でもある。意外なことに祖父ダーウィンはドイツ文学との関連がある。ボナヴェントゥーラという筆名で書かれ、本当の作者が誰であるか

が長年にわたって不明であった<sup>5)</sup>『夜警』(1804)にエラズマス・ダーウィンその人が言及されているのだ。ポナヴェントゥーラは祖父ダーウィンの詩『自然の殿堂』(Temple of Natur)にある、進化論的見解が披瀝され、人間が痛切に風刺された一節を参照する。

Doktor Darwin, den ich hier als mein Stellvertreter und Anwalt aufführe, behauptet nämlich, daß der Mensch als Mensch einer Affenart am mittelländischen Meere sein Dasein verdanke, und daß diese bloß dadurch daß sie sich ihres Daumenmuskels so bedienen lernte, daß Daumen und Fingerspitzen sich berührten, sich allmählich ein verfeinertes Gefühl verschaffte, von diesem in den folgenden Generationen zu Begriffen übergang und sich zuletzt zu verständigen Menschen einkleidete, wie wir sie jetzt noch täglich in Hof- und anderen Uniformen einherschreiten sehen.<sup>6)</sup>

「私がここに代理人かつ弁護人としてあげるダーウィン博士は、次のように主張している。すなわち、人類一般の存在は、地中海地域のある種の猿に由来する。この種の猿が次第に洗練された感情を獲得したのは、ただ親指と他の指の先が触れ合うように、親指の筋肉を操作することを学んだ結果である。そしてこの感情が続く各世代において諸概念に変化し、最後に衣服の着用によって、知的人間が出現したのである。かくしてわれわれは、人々が今日なお、毎日のごとく宮廷の制服あるいは他の何らかの制服を着て歩き回っている姿を見かけるのだ。」<sup>7)</sup>

ニヒリズム的ロマン主義の代表作『夜警』には、以上のようにキリスト教の教義とまっこうから衝突する進化論的人類発生史が語られていた。ダーウィニズムやヘッケルの一元論も同様に、必然的にキリスト教と正面衝突を起こさざるをえないこと、それが支配的な世界観との闘争にほかならないことを、キリスト教文化圏の外部にあるものは常に銘記しておく必要がある。

なお、チャールズ・ダーウィンの進化論にはその祖父の他にもさまざまな先駆者がいるとされ、進化論成立の陰の部分を取り扱った書物も多いが<sup>8)</sup>、近年、ダーウィン進化論の有力な先覚者と目される「謎のX氏」がもう一人浮上してきた。「X氏」の名はエドワード・ブライス (Edward Blyth 1810-1873)。ブライスについては、ローレン・アイズリーが『ダーウィンと謎のX氏』で取り上げている<sup>9)</sup>。

### 1-3. 講演「ダーウィンの進化学説について」<sup>10)</sup>

ヘッケルは、「ダーウィンのブルドック」と呼ばれたイギリスのハクスリと並んで、進化論の擁護と伝播にきわめて熱心な、ダーウィニズムの使徒であった。この節ではヘッケルの講演「ダーウィンの進化学説について」(Über die Entwicklungslehre Darwins) (1863年9月19日、第38回ドイツ自然科学者・医学会議総会での講演)をとりあげ、ヘッケルの進化論の特徴を浮き彫りにしたい。

ヘッケルは講演の冒頭、まずゲーテの詩を引用する。「動物のメタモルフォーゼ」の最

後に近い一節で, [...] höchstes Geschöpf der Natur, du fühlst dich fähig/ Ihr den höchsten Gedanken, zu dem sie schaffend sich aufschwang,/Nachzudenken. (「[...]人間は自然の生んだ最高の生き物だから／もの造りなす大地の母の至上の心を辿りうるのだ」<sup>11)</sup>) という部分である。自然の生んだ最高の生き物である人間においてこそ、つまり進化という生物のメタモルフォーゼの最終段階にある人間においてこそ、進化の過程を最も良く辿りうるのだ、とヘッケルはこの詩の解釈しているのである。

ヘッケルは聴衆に向かって、ダーウィンの進化学説は「世界観全体を変化させる認識に関係するもの」<sup>12)</sup>であると宣言する。現生する動物や植物は「われわれが幼いときから思いこまれてきたように」<sup>13)</sup>おのおのその種類のものとして独立して創造されたわけではなく、すべては「いくつかの僅かな、いやおそらく唯一の祖先形である極度に単純な原生動物から、長大きわまりない年月の間に徐々に発達してきた」<sup>14)</sup>ものである。つまり「モーゼの創造史」<sup>15)</sup>すなわちキリスト教神学的宇宙発生論、全能の神の創造は否定され、唯一の幹から枝として全生物が進化発展してきたという生命の系統樹のモデルが提示されるのだ。リンネによる神学的宇宙発生論、すなわち、「神の霊が最初に生き物を創造したもうたときと同じだけの種が存在する」は次のような哲学的進化学説にとって代わられる。

「地史の一時期の全生物はそれ以前の諸時期の、従って現生のものは過去の世界のものに、由来するのであって、かつて地球上に存在したあらゆる動植物と実際の血縁関係で結ばれている。」<sup>16)</sup>

今ではこれ自体は中学校理科の学習項目に属するであろう、もはや常識の範疇に入るような知見だが、当時はダーウィンの進化学説がコペルニクスやガリレオに匹敵する衝撃を引き起こし、それまでの世界観の変更を迫ったことを忘れてはなるまい。

ヘッケルが冒頭にゲーテを引いたことは単なる偶然ではない。ゲーテが晩年に至るまで自然科学の研究にいそしみ、進化論と旧来のリンネの生物発生論の先駆的論争において、前者を支持する論文を残していることにヘッケルは注目する。その論争のあらまは以下のようなものである。

リンネが主張する「神による種の創造」の観念、すなわち現生する動植物のあらゆる個体が多様な個別の種概念のもとに包括され、「種そのものは不変である」という信条は、フランスの生物学者ジョルジュ・キュヴィエ (Georges Baron de Cuvier 1769-1832) に引き継がれる。それに対して進化論的思想を打ち出したのが同じくフランスのラマルクであった。ラマルクは『動物哲学』(Zoologie philosophique)において「植物および動物の種がごく少数の自然的に成り立った原始形態の漸次的な変化で生じた」とのべ、のちにダーウィンの進化学説につながる見解を発表した。ラマルクに賛同したのがフランスのジョフロワ・ド・サンチレール (Geoffroy de Saint-Hilaire 1772-1844)、ドイツのオーケン<sup>17)</sup> (Lorenz Oken 1779-1851) らである。キュヴィエとド・サンチレールとの論争は1830年2月22日、フランス・アカデミーでの公開会議の場に持ち込まれた。サンチレール側にはしかし、主張を裏付けるような実証的資料が当時はまだ不足しており、論争は結局キュヴィエの勝利に終わる。その後ダーウィンの『種の起源』が現れるまで「種の不変」の信条は30年近く優勢を保つことになる。

自然科学の研究のみならず自然哲学にもたゆまぬ関心を持ち続けたゲーテは、その最晩年に隣国フランスで行われたこの論争にも注目しており、死の直前の論文「動物哲学の原理」(1830-32)ではド・サンチレールを支持し、キュヴィエを批判している。そもそも「動物哲学の原理」(Principes de Philosophie zoologique)というのはド・サンチレールの書いた本の題名をそのまま借りたものなのだ。最晩年のゲーテの筆は荘重な文体で始まる。

Bei einer Sitzung der Französischen Akademie am 22. Februar dieses Jahrs begab sich ein wichtiger Vorfall, der nicht ohne höchst bedeutende Folgen bleiben kann. In diesem Heiligtum der Wissenschaften, wo alles in Gegenwart eines zahlreichen Publikums auf das anständigste vorzugehen pflegt, wo man mit der Mäßigung, ja der Verstellung wohlgezogener Personen sich begegnet, bei Verschiedenheit der Meinungen nur mit Maß erwidert, das Zweifelhafte eher beseitigt als bestreitet, hier ereignet sich über einen wissenschaftlichen Punkt ein Streit, der persönlich zu werden droht, aber genau besehen weit mehr bedeuten will.<sup>18)</sup>

「本年2月22日、フランス・アカデミーの会議場で、将来かならず重大な結果を招かずにはすまないようなとある事件がもちあがった。多数の聴衆を前に、万事そつなく礼義正しくはこばれることを常とし、驕のよい人々の集まりであるために、そのやりとりにも手加減ないしは同意の素振りが見られ、意見が食い違っても決して気色ばむことなく、疑問点についても公に討議するよりも不問に付してしまうことの多いこの場所、他ならぬこの学問の聖堂において、ある学問上の一点をめぐって論争が起きたのである。この論争は個人間の感情的なものに発展しそうなありさまであったが、熟考するならそれははるかにずっと重要な案件であるように思われる」<sup>19)</sup>。

相対立するに至ったのは「フランス・アカデミーの終身書記キュヴィエ男爵と、同じくアカデミーで人望を集めているジョフロワ・ド・サンチレールの二人」<sup>20)</sup>である。なぜゲーテはこの論争に注目したのか。「[...] いったいドイツ人であるあなたがこんな論争に首を突っ込み、いやそれどころかどうやら一方の側を声援しようとなさるのには、どんないわれ、どんな資格があるのか、と問いただされる方がきつといることであろう」<sup>21)</sup>。その「いわれ」とはすなわち、ド・サンチレールがゲーテ自身を含む何人かのドイツ人自然科学者と近い立場を共有していたからである。

ド・サンチレールの「動物哲学の原理」24ページの注には1830年4月5日付のキュヴィエの書簡が引用されている。その書簡でキュヴィエは、ド・サンチレールの理論の背景には「つとに論駁されたものであるにもかかわらず、最近何人かのドイツ人によって、自然哲学とかれらが呼ぶところの汎神論的体系を正当化するために再び取り上げられた」<sup>22)</sup>理論が巧妙に隠されている、としている。ゲーテはこの書簡の一節に「一語一句解説を加え、その意味を明らかにし、敬虔なドイツの思弁的自然哲学者の汚名をそぐためには、確かに八つ折版の本が一冊必要になるであろう」<sup>23)</sup>が、それ程長大な反論もできないので以下に手短かにド・サンチレール、ひいては自分をも含めた「敬虔なドイツの思弁的自然哲学者」の弁護を始めようとする。



ド・サンチレールが言及しているドイツの自然研究者は、キールマイヤー<sup>24)</sup> (Carl Friedrich von Kiemeyer 1765-1844), メッケル, オーケン, シュピックス<sup>25)</sup> (Johann Baptist von Spix 1781-1826), ティーデマン<sup>26)</sup> (Friedrich Tiedemann 1781-1861) 等であるが、そこには「30年にわたって自然研究に従事してきた筆者」すなわちゲーテの名前も添えられている。もっともゲーテは、30年ではなく、私が自然研究に没頭するようになってから「すでに50年以上の年月を閲している」と訂正するのだが<sup>27)</sup>。

以下ゲーテは自分がヒトにも顎間骨があると主張したさいになかなか権威から認めてもらえなかったことや、ド・サンチレールの用語の曖昧さなどを話題にしなが論を進める。進化論的問題にしぼれば、ド・サンチレールは「プランの統一性」(Unité du Plan) という語を使っているが、その代わりに「原型の統一性」(Unité du Type) といった方が「話しをずっと本題に近づけることになったであろう<sup>28)</sup>と残念がる。「プラン」という言葉は家だとか街だとかいう概念を連想させ、あまりに無機的で、有機体生物の創造と進化の比喩としてはなじまないというのだ。

ゲーテが「原型」というものを考案し、そのメタモルフォーゼとしての生物の多様性を主張したことは、あの「原植物」(Urpflanze) でよく知られているであろう。「原植物」なる「原型」がメタモルフォーゼ、すなわち変態によってさまざまに姿を変え、現存する植物群を形成しているのだという思想、つまり根本は同一であるものの変形という思想によって、全植物界は有機的な統一体となる。「原型」はまた一定の外的条件、一定の環境の下である形態 (Gestalt) をとるが、それは決して *statisch* なものではなく、「拡張」(Diastole) と「縮小」(Systole) の絶えざる交替という運動原理からなる *dynamisch* なものであり、また「高昇」(Steigerung) の作用によって、より繊細、純粹、高貴なものへとメタモルフォーゼしていくのだというのが、ゲーテの生成論的な「形態論」(Morphologie)<sup>29)</sup> である。ここからヘッケルの有機体的統一科学までの距離はほんの一步にすぎない。

「動物哲学の原理」の最後にゲーテは「ドイツ人がどうしても捨てることのできない発生論的な思考方法が、今以上の信用を得ると仮定できるなら、必ずや今後とも隣国の地」すなわちドイツから、「好意ある協力の手が」さしのべられることであろう<sup>30)</sup>、ともう一度ド・サンチレールに声援を送り、論は閉じられる。

ヘッケルはこの講演以外でも様々な著作にしばしばゲーテを引用しているが、ゲーテのメタモルフォーゼ説とヘッケルの進化論については他のテキストを扱うさいに再度言及されることになる。

ヘッケルは講演の最後にダーウィンの用語「生存闘争」(Kampf um das Dasein) と「自然選択」(natürliche Zuchtwahl) を持ちだし、そこから宿命的に後の社会ダーウィニズムにつながる発言を始める。すなわち、人間社界におけるのと同様に自然界のいたるところで「仮借ない不断の万人の万人にたいするたたかい」<sup>31)</sup> が行われているのであり、また自然界と同じ進歩の法則が人類の歴史的発展の過程でも作用しているのだ。「市民的、社会的人間関係においても同じ生存闘争と自然選択の原理が存在し、人びとをいやおうなしに前進に駆り立て」<sup>32)</sup> ていく。こうして人間も生存に適した種とそうでない種に分類され、それが「自然の選択」という反論不能な論理で正当化されることになる。ヘッケルは「未来は進歩だけのものなのです」<sup>33)</sup> と断じてはばからない。ヘッケルのこの未来信仰、進歩

信仰の行方を続稿でさらに追っていくことにしよう。

### 注

- 1) 参考文献としてはドイツおよび日本で出版されている各種の百科事典を中心に、哲学事典、生物学事典、人名辞典などを数多く参照した。また進化論全般やダーウィンに関する記述、ならびにヘッケルの講演「ダーウィンの進化学説について」は、すべて八杉龍一氏の編になる『ダーウィニズム論集』（岩波文庫、1994年）に負っている。この書なくして拙論はありえなかった。ここに深く謝意を表したい。
- 2) 「ドイツのキュヴィエ」と言われるほどの名声を得た比較解剖学者。ハレ大学教授。
- 3) ここにあげたのはヘッケルの著作のほんの一部である。2000年11月現在の日本の Webcat で検索可能なヘッケルの著書は、かなりの数の重複や英訳を含めてではあるが250件近くもある。
- 4) 八杉龍一編：『ダーウィニズム論集』12頁以下の引用による。
- 5) シェリング説、アルニム説、ブレンターノ説、ホフマン説等があったが、現在ではアウグスト・クリンゲマン (August Klingemann 1777-1831) 説が最も有力である。クリンゲマン説が浮上したのは1985年、原作が現れてから実に191年が経過していた。cf. Walther Killy: *Literaturlexikon. Autoren und Werke deutscher Sprache*. Bertelsmann Lexikon Verlag. Bd. 2. Gütersloh/München, 1989, S. 102f.
- 6) Bonaventura: *Nachwachen*. Universal-Bibliothek Nr. 8926/27, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 1964, S. 73.
- 7) ボナヴェントゥーラ：『夜警』、平井正訳、現代思潮社古典文庫、1967年、84頁以下を参照したが、新たに訳出した。
- 8) 例えばウォレスの先駆性を強調したアーノルド・C・ブラックマンの『ダーウィンに消された男』（羽田節子・新妻昭夫訳、朝日新聞社、1984年）など。
- 9) 八杉龍一編：『ダーウィニズム論集』16頁参照。Loren Eiseley: *Darwin and the Mysterious Mr. X*. 1979. 『ダーウィンと謎のX氏』というタイトルで工作舎から翻訳が出ているが、未読である。
- 10) 残念ながらこの講演が所収された原書にあたることができなかった。訳はすべて八杉龍一編：『ダーウィニズム論集』95頁以下による。
- 11) Goethe, Johann Wolfgang von: „Metamorphose der Thiele“. In: *Goethes Werke*. Weimarer Ausgabe in 146 Bänden, dtv, 1987, Bd. 3, S. 91. 訳文は八杉龍一編：『ダーウィニズム論集』で借用されている高橋義人・前田富士夫訳（ゲーテ：『自然と象徴—自然科学論集—』富山房百科文庫、1982年、19頁）によった。
- 12) 八杉龍一編：『ダーウィニズム論集』96頁。
- 13) 同上。
- 14) 同上。強調はヘッケルによる。
- 15) 同上99頁。
- 16) 同上103頁。
- 17) 比較解剖学者、自然哲学者。イエーナ大学、ミュンヘン大学を経て晩年はチューリ

ヒ大学初代学長。ゲーテとは別に頭蓋椎骨説を唱え、発見の先取権をめぐってゲーテ支持者とのあいだに論争が起きた。

- 18) Goethe, Johann Wolfgang von: „Principes de Philosophie zoologique“. In: *Johann Wolfgang von Goethe, Werke*. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, Bd. 13, S. 219.
- 19) 潮出版社版『ゲーテ全集』第14巻所収の高橋義人氏による訳を参照させていただいたが、訳語は少し変えた。
- 20) Goethe: „Principes de Philosophie zoologique“. a.a.O., S. 220.
- 21) ebd., S. 227.
- 22) ebd., S. 227. 強調はキュヴィエによる。
- 23) ebd., S. 227f.
- 24) チュービンゲン大学教授。比較解剖学の先駆者の一人で、キュヴィエが比較解剖学に興味を持つようになったのもキールマイヤーの影響と言われる。
- 25) 動物学者。頭蓋の研究で知られる。
- 26) 消化に関する生理学的研究が有名。ランツフト大学からハイデルベルク大学に移る。
- 27) Goethe: „Principes de Philosophie zoologique“. a.a.O., S. 228.
- 28) ebd., S. 247.
- 29) 潮出版社版『ゲーテ全集』第14巻所収の「形態学序説」ならびに「植物学」、および池田紘一氏の以下の論考を参照した。池田紘一：ゲーテの詩「植物のメタモルフォーゼ」。西日本独日協会年報第14号所収，14-28頁。福岡，1990年。
- 30) Goethe: „Principes de Philosophie zoologique“. a.a.O., S. 250.
- 31) 八杉龍一編：『ダーウィニズム論集』109頁。強調はヘッケルによる。
- 32) 同上111頁。強調はヘッケルによる。
- 33) 同上112頁。強調はヘッケルによる。